

## 第8回 日本不育症学会学術集会

### 一般演題

名古屋 2026/6/13

### 流産症例における腔細菌叢の特徴と PCR 検査の意義

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック<sup>1</sup>、HORAC グランフロント大阪クリニック<sup>2</sup>

○門上大祐<sup>1</sup>、中岡義晴<sup>1</sup>、森本義晴<sup>2</sup>

#### 〔目的(または背景)〕

これまでに、*L. crispatus* 優勢の菌叢 (*Lactobacillus* dominant : LD-C) は良好な妊娠転帰と関連することが示されている一方、非 *Lactobacillus* 優勢 (non-*Lactobacillus* dominant : NLD) や、*L. iners* 優勢の LD (LD-I) は、腔内環境の変化や炎症反応を介して流産リスクと関連する可能性が報告されている。近年、菌種および菌量を簡便かつ定量的に評価可能な PCR 法が腔細菌叢評価の臨床ツールとして用いられるようになり、当院では2025年6月以降、初診患者に対するスクリーニング検査として、また流産後など必要に応じて、PCRによる腔細菌叢評価を実施している。

本研究では、初期流産直後に施行した腔 PCR 結果を、スクリーニング検査として施行した腔 PCR 検査の結果と比較し、腔細菌叢と流産との関連を評価することを目的とした。

#### 〔方法〕

自然流産の診断後に腔 PCR 検査を施行した12例を流産群とした。全例過去に腔細菌叢検査歴はなかった。対照群として、初診時スクリーニングとして腔 PCR 検査を施行した620例を用いた。

#### 〔結果〕

流産群では、NLDが7例(58.3%)、LD-Iが5例(41.7%)であった。一方、対照群では、NLDが47.1%、LD-Iが13.1%、LD-Cが29.0%であった。NLDとLD-Iの割合は対照群と比較して流産群が有意に高値であった( $p=0.00454$ )。さらに、年齢および総菌量の影響を考慮した解析においても、NLDおよびLD-Iは流産群に多い傾向を示した。

#### 〔結論(または考察)〕

腔細菌叢の異常が流産に関与する可能性が示唆された。初診時スクリーニングとして PCR 法による腔細菌叢評価を行うことは、流産リスク層別化の観点から臨床的意義を有する可能性があると考えられた。